第2章　牧畑と農村社会

——浦郷町の概況——

細　野　誠　之

ま　え　が　き

この報告は牧畑式経営による特殊な農業と漁業を基礎的産業とする浦郷町の概況とその経済社会の特質について，述べたものである。

本文において利用した原資料は太平洋戦争以前より現在に至る統計調査報告及び文書であるが，戦前の統計報告は調査方法において戦後の統計と異なるので，戦前から戦後への変貌を正確に説明することは困難であつた。しかも社会経済的考察に必要な古文書類の検討は調査実施の都合から極めて不十分であつたから調査地の経済社会構造の実態報告としては不完全なものであるが，この報告によつて一応浦郷町がどのような性格の村であるか，また日本の普通の農村と比べてその性格がどのように異なつているかを推察することができよう。

第1節　自然的條件

農漁村の経済社会の性格が，自然的条件によつて大きく制約されていることはいうまでもない。ここではそういう規制力としての自然的条件について観察をして見よう。

第1　位置・地勢・面積

1，位　　置

浦郷町は「隠岐」島前の西之島の西南部を占め，町の東部は黒木村に接し南西は赤灘の瀬戸を隔てて知夫里島（知夫村）と相対して，町の南と北は海を以て包まれ地形は南北に長く東北より西南に彎曲している。（附図参照）

本土への最短距離は八束郡野波村多古まで37.21kmである。汽船にて境港へ約5時間の距離にあり，離島として本土から隔離された位置にある。

2，地　　勢

一般に標高 400m以下の山地で，北岸の三度（みたべ）及び内海に面した珍崎・赤之江・本郷の四部落を除いて平野はなく山が海岸に迫つており，道路は狭く部落内を除いては自転車の交通も困難な場所が多い。本郷から隣村黒木村へは自動車道路が通じている。

浦郷には河らしきもの全くなく，用水は極めて不足しているので水田は極めて少ない。また町の面積の7割以上を占めている山地は牧畑となつており，放牧及び粗放な耕作が行なわれるとともに一部は山林草地となつている。この牧畑はわが国の農村に類例のない特殊な土地利用

方式である。

海岸は北岸の外海に面した部は断崖絶壁をなしている。内海に面した部分は浦郷湾となり，島根鼻が中央に突出し，東に浦郷港，西は由良内海を形成している。

3，面　　積

町の総面積は16・99平方粁，延長8・2粁，幅は最広部で3・8粁である。

町の土地利用上最も特徴的な牧畑の厳密な面積は測定されていないが，総面積の7割近くを占めている。水田及び畑地は僅か7分である。

第2　地　質・土　性

才三紀層の外部を粗面玄武岩を以ておほわれたもので由良牧の一部分及び三度は沖積層である。

土壌は一般に表土浅く有機質少なく瘠薄である。（詳細は才4章参照）

第3　氣　候　と　天　候

1，氣　　温

浦郷町の年間月別日平均最高最低気温を島後西郷町及び本土（松江市）と比較すると次のとおりである。平均気温は2°C位西郷より高い。

才2—1表　浦郷の気温(年間月別日平均最高最低気温)(昭和25・4，累年平均)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月	
	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低
浦郷	8.3	2.1	8.0	1.5	11.3	3.7	16.9	8.1	20.8	12.3	24.4	16.7	28.5	21.5	30.8	23.1	26.8	19.1	21.8	13.6	16.5	9.1	11.0	4.6
西郷	6.6	0.2	6.5	0.3 (−)	10.3	1.6	16.0	6.2	20.2	11.2	24.0	16.3	28.0	21.5	30.2	22.2	25.4	18.3	20.3	11.6	15.6	7.5	9.8	3.0
松江	7.3	0.7	7.7	0.6	11.4	2.5	17.8	7.2	22.4	11.9	26.1	17.0	30.6	21.7	31.7	22.8	27.0	18.6	21.5	11.8	16.0	7.1	10.3	2.9

2，降　水　量

年間月別合計降水量を西郷と比較すると次表のとおりで西郷より年間合計200mm位浦郷は少ない。

才2—2表　浦郷町降水量(昭和25年4月累年平均)（西郷及松江との比較）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
浦郷	139.0	105.3	106.0	108.2	92.6	152.3	147.0	112.4	214.1	118.5	102.6	135.0
西郷	76.1	131.9	116.5	99.1	100.5	188.1	121.0	107.7	308.3	152.3	99.9	188.2
松江	157.98	138.04	130.34	127.10	105.12	168.98	159.02	139.52	239.55	154.24	126.76	171.24

（註）　年間の合計降水量：（浦郷）1533.1mm、（西郷）1789.6mm、（松江）1812.88mm

3，霜　　雪

霜雪は少なく，雪は最高30cm内外である。降雪日数は年平均21日（昭和16年～25年）で，松江市の半分位である。

4，風　　向

風は割合強く冬の恒風は西或は北西風が強い。春より夏の海上は比較的静かである。

5，浦郷村昭和12年13年の平均各月天候調査表（参考資料）

才2—3表　天候調査（昭和12年13年平均浦郷村）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
晴	日 2.5	8.5	12.0	17.0	20.5	15.5	13.5	24.0	19.0	16.5	22.0	12.5
曇	19.0	12.0	13.5	11.0	8.5	8.5	12.0	5.5	8.0	10.0	4.5	7.5
雨	4.0	4.5	5.5	2.0	2.0	6.0	5.5	1.5	3.0	4.5	3.5	7.5
雪	5.5	3.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.5

（註）気候天候に関する資料は松江測候所調査のもの。

第2節　歴史的背景

隠岐島は古い歴史を持つていることは古事記以来多くの文献によつて明らかである。現在が過去の発展であるとするならば浦郷町の社会経済的性格を知るにはその歴史的背景について概観することが必要である。

第1　村落の成立より徳川時代までの歴史

浦郷の歴史は古く，既に和名抄に「宇良郷」とあり，当時の住民は牧畑による牛馬の放牧と耕作及び漁業によつて村落共同体をなして生活をしていたものと推察されるが，詳しいことは文献もなく不明である。

1，流島の地としての浦郷

聖武天皇の神亀元年に配流地として定められまた延喜式獄令により流島の地とされ，流罪人は極めて多かつたが，文献によると身分の高い流人の少なかつたことが島内他村（例えば海士村）と異なるところである。（徳川時代の流人も小者が多く，しかも武士階級の者は比較的少なかつたといわれている。）

2，徳川時代の浦之郷村

この時代の浦郷は牧畑を中心として村の生活が営まれており，漁業は兼業的の性格であつたようである。隠州視庁合記（寛文7年）によると当時の村落は本郷，鵜須子，荒尾井，珍崎，赤之江，生名，三田部の部落より構成されていたが，全体で一ケ村をなしそれ以来全く改廃分

合されることなく明治に及んだのである。

(1) 元祿3～4年頃の村勢

総人口1,068（男492，女576）で石高1,186石9斗9升9合，内田方は76石6斗2合，畑方は1,110石3斗9升7合で畑方は牧畑の生産物(麦)であつた。家畜頭数は馬は149頭で，牛は168頭，漁舟は64隻であつたという。牧畑には小作制度もあつたが詳しいことは不明である。また当時は屢々饑飢に見舞われており，文政年間には甘藷貯蔵穴が各所に設けられた。

(2) 慶応4年には人口1,930（男947，女983）という。

第2 明治以後の行政的沿革

明治12年に浦郷村戸長役場が本郷におかれた。同17年に宇賀，別府，美田，浦郷の四村連合して美田外三村戸長役場を美田村においた。同24年に至り浦郷村は分離して，浦郷戸長役場が本郷におかれた。

1，隠岐国町村制度の実施

明治22年の市町村制は隠岐島には施行されず，明治37年に至つて隠岐国町村制度が実施されて，浦郷村役場が本郷におかれた。今崎半太郎氏が最初の村長となり以来43年間，昭和21年11月3日まで在勤した。

2，昭和21年11月より町制がしかれ，浦郷町と改称した。

第3 交通機關の發達

近代的交通機関の発達は村落を外部に開放し，都市との社会的距離を短縮し村の社会経済的性格に大きな変化を与えるものである。

1，明治18年2月，隠岐丸（90トン）の就航が開始され，初めて本土との間に定期航路の開かれたことは明治以来の最も大きな問題であつた。即ち本土からの物資の移入が便利になり特に食糧（米）の移入も漸次行なわれるようになつて村の自給経済に大きな変化を与えた。

2，大正3年舟引運河（黒木村）が開通されたが，これによつて美田湾と外海とが直結され，浦郷村の交通上及び沿海漁業の発展に寄与するところが大きかつた。

舟引運河は長さ180間，幅4間で工費1万7千円で浦郷村と黒木村との共同事業で建設された。

第4 生業の變遷

離れ島の農漁村社会のすがたを変化させる動力として先ず交通の発達による経済的距離の短縮と社会的接触の増大との二条件を挙げなければならない。即ち明治18年の隠岐丸の就航開始は村の自給経済を崩壊させ，更に発展期にあつた日本資本主義経済の影響を受けしむるに至つ

たのである。かくして出稼者の増加と牧畑農業の衰退を来して，昭和の初期には出稼者の送金が年額5～6万円に上り，出稼者を媒介として食生活の変化（米食の増加）その他社会経済生活全般に影響するところが大であつた。

漁業においても，わが国の多くの農漁村と同様に，地先の海を主な漁場とする零細な兼業的漁業であり，その生産力も頗る低く，最近になつて漸く近代的漁法による専業経営が発生したという状態であつた。

このように浦郷は農漁村であるが，村の発展が牧畑の盛衰と密接不離な関係をもつていたことはその大きな特徴である。

第3節　人口と土地

浦郷町の産業経済について述べる前提として，人口と土地の概況につて簡単に基礎資料を挙げて説明しよう。

第1　人　　口

浦郷町の現住人口は昭和27年7月1日現在で3,551名，総世帯741でその男女比は92（女＝100）である。人口密度は昭和27年7月1日現在で210，隠岐島全体の平均128，黒木村の98.2と比べ著しく大きい。なお浦郷町の部落別人口数及び世帯数は次のとおりである。

才2—4表　部落別人口及世帯数（昭和25・10・1）

	本郷	赤之江	三度	珍崎	計
人口	2,054	597	466	434	3,551
世帯	416	131	92	86	725

備考：725世帯のうち準世帯41を含む。

1，人口の變化

大正3年以来の浦郷町の人口の変化を観察すると次表のとおりである。

才2—5表　人口の変動

	大3	大9	大14	昭5	昭10	昭15	昭20	昭21	昭22	昭25	昭27
浦郷	3,370	2,896	2,623	2,573	2,438	2,427	3,237	3,164	3,378	3,551	3,551
隠岐島全体	41,026	36,539	34,580	34,134	32,750	31,794	39,663	40,080	42,400	35,093	44,088

催　考：(1)　大正3年を除いて何れも国勢調査(昭20.21:27年は人口調査，22年は臨時調査)資料による。
　　(2)　昭和28年4月末人口は3,438名（役場調査）

資料は不完全であるが，上表から次の傾向を知ることが出来る。即ち(1)大正3年以来昭和21

年まで人口は減少しているが，出稼によるものと考えられる。 (2) 終戦以後は僅かに増加しているが増加の割合は極めて少ない。 (3) なお本籍人口については資料が乏しいが昭和10年に4,151名，28年4月は4,862名であり，その当時の常住人口と比べると出稼者の多いことが推察される。

2，産業別就業人口の變動

最近の男女14才以上産業別就業人口の動きは次表により推察することが出来る。（資料は国勢調査結果報告）

才2—6表　産業別就業人口の変動

	浦郷町	才一次産業				才二次産業					才三次産業								合計
		農業	林業	水産業	計	鉱業	建設工業	製造工業	電気水道ガス業	計	商業	金融	サービス業	運輸通信	自由業	公務	その他	計	
昭和22年	実数	1,067	3	242	1,312	—	20	78	1	99	56	5	17	32	40	34	11	195	1,606
	比率(%)	66.4	0.2	15.1	81.7	—	1.2	4.9	0.1	6.2	3.5	0.3	1.0	2.0	2.5	2.1	0.7	12.1	100
昭和25年		農業	林業狩猟	漁業	計	鉱業	建設業	製造業	その他	計	卸売小売		サービス業	運輸通信		公務		計	
	実数	760	8	353	1,127	1	32	219	—	252	54		115	42		40		251	1,630
	比率(%)	47.0	4.9	21.7	73.6	0.0	1.9	13.4	—	15.3	3.3		7.1	2.7		2.5		12.3	100

即ち農業が圧倒的に重要な位置を占め，次に漁業が才二位を占め漸次増加する傾向にあることがわかる。

第2　總戸数と職業別戸数の變化

総戸数と職業別戸数の変化は次表のとおりである。人口増加に比べて戸数の増加数は多く，1戸当りの人口の減少したことを示している。なお職業別戸数の統計資料は県統計書より引用したものであるが調査基準が不明確で信頼度は高くないが参考資料として挙げておく。

才2—7表　職業別戸数の変化（島根県統計書）

	農業	水産	工業	商業	交通	公務自由	その他有業	計
	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸
昭10	248	163	25	57	6	18	3	520
昭16	207	122	90	141	6	20	5	597
昭18	222	130	110	143	6	24	4	639
昭21	245	137	152	169	8	29	4	745

第3 土　　地

浦郷町の土地の利用状況は，わが国一般の農村とは異なり極めて特殊な性格をもつている。即ち耕地が極めて少なく，また山林に乏しく土地総面積の7割以上が牧畑になつていることである。

地目別に分けた浦郷町の土地面積は，牧畑の面積が不明確のため正確に知ることは難かしいが，二，三の資料をあげて説明しよう。

1，昭和25年浦郷町土地利用表

才2—8表　土地利用表（隠岐島綜合開発計画書p.13）

総面積	耕地		林地		原野		放牧地		採草地		宅地		其の他	
	面積	比率	面積	比率	面積	比率	面積	比率	面積	比率	面積	比率	面積	比率
町	町	%	町	%	町	%	町	%	町	%	町	%	町	%
1,699	119	7.0	393	23.1	47	2.8	53	3.1	30	1.8	12	0.7	1,045	61.5

上表の（註）によると「牧畑は耕地，宅地以外の地目に含まれる」と規定されているが，利用形態の不明な「其の他」の面積が1,045町歩で極めて広い面積を占めている。

2，昭和7年浦郷村経済更生計画書による地目別土地面積

才2—9表　昭和7年度地目別土地面積

田	畑		山林原野	宅地	合計	備考
	年々畑	牧畑				
反	反	反	反	坪	反	
429	1,485	11,120	1,000	40,543	14,164	宅地は反に換算す

上表によると牧畑は1,112町歩位となつている。

3，昭和28年土地台帳による地目別土地面積

最近の資料は下表のとおりであるが，田・畑の面積における減少の傾向が観察される。逆に僅かに山林が増している。

才2—10表　最近の地目別土地面積（昭28.4）

民有地					備考
田	畑	宅地	山林	雑種地	
町	町	坪	町	町	
36.9	873.7	36,850	127.5	33.4	1．山林は殆んど伐採されている。 2．牧畑は畑に含まる。

上表によると畑の面積が昭和7年に比べ著しく減少しているが計算の基準が異なるから必ずしも正確な数字ではない。

このように地目別面積は不明確であるが，約 1,000町歩内外が牧畑であると推定される。

しかも牧畑の所有形態は法的には全く私有地であり，部落有地或は村有地でないことは注目すべきことである。

4，耕　地　面　積（農林統計による）

浦郷町の最近の耕地の利用状況を農林統計調査の資料から引用して見ると下表のとおりであつた。

第2—11表　農家の利用種類別経営土地面積

（昭和25年世界農業センサス）

経営土地総面積 (A)＋(B)	山林（放牧しないもの） (B)	農用地					
		農用地総面積 (A) (a)＋(b)＋(c)＋(d)	その他の土地の総面積 (d)	耕地			
				耕地総面積 (a)＋(b)＋(c)	田 (a)	樹園地 (b)	畑 (c)
反	反	反	反	反	反	反	反
2,409	36	2,373	1,191	1,182	285	25	872

上表は利用形態による土地面積であるが，水田及び畑の減少の傾向がここでも観察される。牧畑については農業センサスの資料からは何も説明することは出来ない。

このように浦郷町では，土地利用状況が，普通の農村の様に統計資料により正確に把握することが出来ないので，農業の実態を調査する際に極めて不便であつた。

第4節　農業と漁業

浦郷町の産業構造（農業と漁業の位置）は前節の説明によつて大体理解することができるが，さらに詳しく観察して見よう。

第1　浦郷町の産業別生産額の變遷

次表は昭和10年から昭和20年までの産業別生産額であるが，農業と漁業の占める位置の重要であることが観察されるのである。最近の資料はないがこの二つの産業の占める地位は今も変りはない。

第2—12表　産業別生産額（島根県統計書）

	農産(円)	林産	畜産	水産	工産その他	計(%)(円)
昭10	114,004 (49.1%)	5,598 (2.4)	17,572 (7.6)	83,500 (35.9)	11,694 (5.0)	232,368 (100.0)
昭16	168,073 (19.8)	1,700 (0.2)	12,900 (1.5)	635,565 (74.7)	32,000 (3.8)	850,238 (100.0)
昭17	159,902 (19.7)	2,230 (0.3)	14,300 (1.8)	561,277 (69.2)	73,500 (9.0)	811,209 (100.0)
昭18	193,270 (17.6)	3,300 (0.3)	13,700 (1.2)	763,424 (69.6)	123,500 (11.3)	1,097,194 (100.0)
昭19	190,306 (15.5)	3,800 (0.3)	14,000 (1.1)	786,689 (64.1)	233,000 (19.0)	1,227,795 (100.0)
昭20	218,889 (8.4)	3,950 (0.2)	209,600 (8.1)	1,152,776 (44.3)	1,013,500 (39.0)	2,598,715 (100.0)

しかも畜産と漁業，林業は殆んど農家が生産主体として，兼業的に行なつているから，一部の専業漁家を除いて農業と独立した関係にある産業は僅かである。

また山林少なく林業生産は現状においては余り重要な地位を占めていない。

第2 農業生産の現状

1，主要農作物生産額

隠岐島総合開発計画書によると昭和25年浦郷町の農作物の生産量及び生産額は次表のとおりである。

才2—13表　主要農作物生産額（昭和25年）

	水稲	麦類	雑穀	豆類	いも類	そさい類
生産量	石 285	石 895	石 68	石 280	貫 71,000	貫 32,600
生産額	千円 1,995	3,133	272	2,800	2,153	1,630

（隠岐島綜合開発計画書p.129）

上表は生産額であり実際に商品化された金額は不明であるが，豆類，いも類（主として牧畑の生産物）を除いて販売されている農作物は殆んどない。従つて浦郷町の農業は自給的生産であることが理解されよう。

2，主要作物栽培面積及び戸数

昭和22年臨時農業センサスによると主な作物の栽培面積と戸数は次表のとおりであるが，牧畑と本畑別の栽培面積を知ることは出来ない。

才2—14表　主要作物栽培面積及び戸数

（昭和22年8月1日）

	水稲	大麦	稞麦	小麦	じいもやが	さいつまも	そば	とうろこしも	あわ	ひえ	きび	大豆	豆類その他	大根	そさいその他	果樹	茶	なたね	桑	その他
栽培戸数	戸 186	529	44	511	334	485	122	4	436	4	124	442	258	305	320	7	6	1	47	6
栽培面積	反 267	474	16	103	12	183	36	—	70	—	15	188	65	50	55	1	—	—	36	—

3，畜　産

浦郷の牧畑では徳川時代から牛馬の飼養が盛んで，牧畑の耕作に使用され同時に犢及び幼駒を生産していた。明治以後における家畜飼養頭数を示すと次表のとおりである。

才2—15表　牧畑における家畜頭数

	明治40年	大正3年	〃 7年	〃 15年	昭和5年	〃 10年	〃 16年	〃 21年	〃 25年
牛	861	972	844	414	562	966	667	387	578
馬	262	241	234	99	126	186	191	56	50

備考　；　明治年間は久保氏調査，昭和以降は中国農試調査による。

次に最近の家畜飼養頭数及び生産頭数について簡単に説明しよう。

(1) 昭和28年家畜調査による飼養頭数

才2—16表　家畜飼養頭数（昭和28年2月1日）

農家戸数	家畜家禽	役肉用牛		豚		山羊		緬羊		にわとり	
	飼養戸数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	羽数
495	468	465	535	17	30	7	15	11	16	431	1,017

（島根県統計月報）

(2) 家畜生産頭数

隠岐支庁調査によると昭和25年度の家畜生産頭数は次表のとおりである。

才2—17表　家畜生産頭数（昭和25年）

	牛	馬	豚	山羊	にわとり	あひる	うさぎ
	頭				羽		
浦郷	302	14	54	11	161	180	15

（隠岐島総合開発計画書より）

なお同年の家畜生産価額は6,489千円で農家1戸当り13,800円であると。（県畜産課調査）

4，最近の農業生産額の總額（昭和25年）

上に述べた農作物，畜産物その他農業生産物の総価額を計算すると次表のとおりになる。

才2—18表　昭和25年農業生産額（隠岐島総合開発計画書）

	農作物	まゆ	畜産物	計	農家1戸当り
	千円	千円	千円	千円	円
浦郷町	11,983.0 (63.5%)	358.2 (2.1)	6,489.0 (34.4)	18,830.2 (100)	40,400
隠岐島総計	323,890.0 (87.0)	10,122.5 (2.7)	38,027.0 (10.3)	372,039.5 (100)	60,600

上表によると農作物と畜産物で総生産の97.9%を占めており，僅かに養蚕業が行われ繭生産のあることがわかる。しかし養蚕戸数は28戸（昭和25年農業センサス当時）で極めて小規模である。

第3　農業生産手段

家畜については上述したとおりである。ここでは農機具類及び肥料について簡単に説明すると次のとおりである。

1，農　機　具

昭和22年臨時農業センサスによると浦郷町農家の農機具の状況は次表のとおりで，電力不足のためモーターは皆無，石油発動機も数台に過ぎず普通の農村に比べ誠に貧弱である。

才2—19表　農機具の状況（昭和22年8月1日）

畜力用すき	346台	(要修理)	48台	(計)	394台
く　わ	1,534	(　〃　)	218	(〃)	1,752
か　ま	1,463	(　〃　)	31	(〃)	1,494

なお農家の畜力及び動力機械使用状況については，昭和25年世界農業センサスの資料によると次表のとおりである。

才2—20表　畜力及び動力機械使用農家数

畜力も機械力も使用しなかつた農家数	畜力のみ使用した農家数	畜力と機械力を使用した農家数	機械力のみを使用した農家数	牛を畜力として利用した農家数	石油発動機を使用した農家数
75	369	20	2	389	22

上述の「すき」は「隠岐すき」であり，牧畑の耕作に使用されているものである。

2，購　入　肥　料

牧畑を中心とする浦郷の農家の肥料購入額は普通の農村と比べて極めて少ない。

浦郷町農業協同組合において昭和27年度に取扱つた化学肥料の販売額は次表のとおりである。

才2—21表　昭和27年度化学肥料販売量

硫　安(10貫俵)	石灰窒素(6貫俵)	過燐酸石灰(10貫俵)
800俵	120俵	400俵

牧畑の耕作には化学肥料の使用量は少ないから，上記の肥料は殆ど水田及び年々畑に使用したものであろう。

第4　農　業　生　産　力

次に浦郷町の農業生産力はどの程度であろうか。米麦類の平均反当収量調査を除いて，生産力の指標となる統計資料が乏しく，しかも浦郷で重要な地位を占めている牧畑の生産力については信頼度の高い資料がないのでここでは省略しておく。

才2—22表　米，麦平均反当収量の変化

	昭 23	昭 24	昭 25	昭 26	昭 27
米	石 1.61	1.64	1.04	0.75	1.48
麦	0.72	0.81	0.90	—	—

備考：島根統計調査事務所調査

第5 漁　　業

浦郷町の水産物生産額は昭和25年度6千万円位，昭和27年度は8千万円位（推定）であり，町の産業生産額の首位を占めている。しかしそのうち漁業農家或は専業漁家の生産額は極めて少量であり，その生産技術（漁法）は概して遅れている。協同組合及び個人業主の近代的巾着網漁船による漁獲物が大きな地位を占めている。

1，漁業經営体の概況

経営主体の性格は表のとおりであるが，兼業漁家は殆んど農業者の兼業としての漁家である。

才2—23表　漁業経営体（昭和26年）

	経営体	企業	自営経営体（漁家）		
	総数	経営体	総数	専業	兼業
浦郷町	287	13	274	52	222

（隠岐島総合開発計画書p.111）

2，漁　船　数

昭和10年の浦郷村の漁船数 133（内動力船36）に比べると最近における漁業の発展による漁船の増加は著しいものである。

才2—24表　漁　船　数（昭和27年1月末）

	5屯未満動力船	5屯以上動力船	無動力船
浦　郷	81	21	189

（隠岐島総合開発計画書p.106）

50屯の巾着網漁船は2隻あるが，1隻は水産業協同組合所有で，他は個人業主の所有である。

3，主な漁獲物

昭和26年の主な漁獲物は「いか」「ぶり」「いわし」「さば」「さめ」「とびうお」「しいら」等で，総漁獲高（推定）61万貫であつた。「いか」はその中で才一位を占め40万貫で，才二位は「ぶり」の5万3千貫となつている。

第6 林　　業

島後に比べて島前特に浦郷町の林業は現状においては産業としての地位は低い。特に隣村黒木村に比べて林産物生産額は極めて少ない。隠岐島総合開発計画書によると昭和25年度に用材生産量「松」600石，生産額は216千円に過ぎない。

第5節　生産主体の性格

次に上にのべた農業を営む生産主体はどのような性格をもつているか，簡単に説明しよう。

第1　農業経営規模

経営規模別農家数の変遷は次表のとおりであるが，牧畑は含まれていないと考えられるので必ずしも浦郷の農業経営規模の実態を正確に示しているものではない。

才2—25表　農業経営規模別農家数の変化

	3反未満 (%)	3反～5反	5反～1町	1町～1.5町	計	資料
昭和22年	423 (80.0)	79 (15.0)	24 (4.5)	3 (0.5)	529 (100)	臨時農業センサス
〃 25年	317 (68.0)	90 (19.4)	52 (11.2)	3 (1.4)	466 (100)	世界農業センサス
〃 28年	318 (70.0)	82 (18.2)	49 (10.8)	2 (0.5)	451 (100)	統計調査事務所

上表によると3反未満の零細農が圧倒的に多いことがわかる。浦郷ではこのような零細農家が兼業として漁業を営んでいるのが特ちようであるから，専業兼業別農家戸数との関係を中心に考察すると次のとおりである。

1，專業，兼業農家戸數の變化

才2—26表　専業，兼業農家数の変化

	専業 (%)	兼業			合計	資料
		農業を主	他産業を主	計		
昭和9	240 (55.0)	—	—	197 (45.0)	437 (100)	村役場
〃 22	94 (17.8)	216 (40.7)	219 (41.5)	435 (82.2)	529 (100)	臨時農業センサス
〃 25	86 (18.5)	167 (35.7)	213 (45.8)	380 (81.5)	466 (100)	世界農業センサス

上表によると昭和9年に比べ専業農家は最近著しく減少し，逆に兼業農家が激増している。また他産業を主とする兼業農家も増加している。専業兼業状態を経営規模別に分類すると次表のとおりである。

2，經営規模別專業兼業別農家数

才2—27表　経営規模別專業兼業別農家数
（昭和22年臨時農業センサス）

	專業	才1種兼業		才2種兼業		計（戸）
		農業を主 他産業を従	農業を主 賃労仂を従	他産業を従 農業を主	賃労仂を従 農業を主	
3反未満	72	141	5	114	91	423
3反～5反	15	49	3	10	2	79
5反～1町	6	16	1	1	—	24
1町～1.5町	1	1	—	1	—	3

上表によると3反未満の零細農家の82％が兼業農家である。しかも才2種兼業農家の方が多くなつている。

第2　收入別及び経営業態別農家数

1，經営業態別農家数

さらに農家について経営業態別に分類すると次のとおりである。

才2—28表　経営業態別農家数
（昭和22年臨時農業センサスによる）

耕種のみ	耕種と養蚕	耕種と養畜	耕種、養畜及び養蚕	計（戸）
241 (45.5%)	12 (2.4)	241 (45.5)	35 (6.6)	529 (100.0)

2，收入別農家数

次に收入別に農家を分類すると次のとおりである。

即ち全農家の99％の524戸が自給農家であり，稲作農家4戸，麦作農家1戸で販売農産物の殆んど皆無なことは浦郷の農業の大きな特ちようであることを示している。（昭和22年臨時農業センサスによる。）

第3　自作小作別農家戸数の變化

地主小作関係については農林統計資料によつて考察するだけでは不十分であり，特に牧畑における最近の小作関係を把握することが困難であるが，昭和10年の自作小作別土地面積及び最近の自作小作別農家戸数の変化については次のとおりである。

1，昭和10年の自作小作別土地面積

才2—29表　自作小作別土地面積（町役場保存資料）

	自作地	小作地	計	備考
田	町 31.9 (75.0%)	町 11 (25.0%)	町 42.9 (100.0%)	外に牧畑 125町が耕作されその内自作地 110町，小作地15町
畑(年々畑)	101.5 (68.0)	47 (32.0)	148.5 (100.0)	

2，自小作別農家戸数の變化

才2—30表　最近の自小作別農家戸数の変遷

	自作 (%)	自小作	小自作	小作	計	備考
昭 7	141 (56·8)	83 (33.5)	—	24 (9.7)	248 (100.0)	専業及び才1種兼業のみ
昭 22	376 (71.0)	56 (10.6)	65 (12.3)	32 (6.0)	529 (100.0)	臨時農業センサス
昭 25	359 (77.0)	57 (12.2)	23 (5.2)	26 (5.6)	466 (100.0)	世界農業センサス

第4　浦郷町農家の性格

昭和25年世界農業センサスの資料により，次表のような指標によつて浦郷町農家の性格を他村と比較してみると次のとおりである。

才2—31表　浦郷町農家の性格

	1戸当り平均規模	1町以上比率	3反未満比率	専業比率	兼業比率	才1種兼業	1戸当り農作物生産額	有畜農家比率	1戸当り家畜生産額
	反	%	%	%	%	%	円	%	円
浦郷町	2.5	0.6	68.0	18.5	91.5	44.0	25,600	61.0	13,800
知夫村	3.3	3.8	57.8	25.1	74.6	52.2	41,800	57.0	11,500
黒木村	3.6	3.6	53.6	18.2	81.8	57.5	39,600	54.2	11,900

（隠岐島総合開発計画書p.122—123）

第6節　社会生活の素描—むすび—

浦郷町経済社会の実態については上に述べたとおりであるが，これを総括すると次のとおりである。

即ち最近牧畑の重要性は漸次低下しその産業構造は変化しつつあるが，浦郷町の社会は今もなお共有入会地的性格の牧畑を生活の中心とした零細な自給的農業と小規模な漁業とを生業とする自給自足的弱小生産主体の集団社会であると理解することが出来よう。そしてわが国の普通の農村との相違も，牧畑が食糧及び農業生産の場所であり同時に家畜生産の場所であつて村落の社会経済生活（日常の生活を含めて）の中心であるという点に見出すことが出来よう。

次に浦郷に残存している一，二の社会慣行を挙げて，村落の社会生活のすがたをえがいてみよう。

第1　牧畑における放牧權の共有と所有權

牧畑は浦郷町においては全部個人所有地であり，普通の入会地と異なつて村有地或は部落有地ではない。

しかもその利用権（放牧権）は数百年来の慣行によつて村民は誰でも土地所有の有無にかかわらず，それを有しており，牛馬をその頭数に制限なく放牧することが出来る。また牧柵の修理，放牧の時は部落統制により村民が各々その仕事を分担する義務を負うている。

また牧畑は「耕作強制」であつて，耕作者は一定時期以外に耕作をすることは出来ないし，放牧者は作物収穫後でないと放牧することが出来ない方式である。

一方その所有権は制限されず，所有者の意志によつて自分の土地の周囲に自由に柵（込垣，こめがき）をつくることが形式的には認められていることは特筆すべきことである。

しかしながら何れにしても牧畑は自由式或は輪作式の如き進歩した農法と比べると遙かに遅れた主穀式農法であり，またそれが耕作強制であるという点を考えると，近代的な完全な私有権は牧畑においては行使できないことになる。

この様な牧畑制度の存在は浦郷の社会構造に普通の農村とは異なる特殊な性格を与えるものであろう。

第2　磯の口明（くちあけ）の慣行

磯の口明は海藻類の採取を一定の期間を限つて行なう慣行で漁村に残存する海産物採取の部落統制である。浦郷では「す（洲）が立つ」と云い，「てんのす」（てんぐさの採取），「わかめのす」「もばのす」（肥料用の海藻の採取）等がある。

磯の口明に対して山の口明（草刈のす）慣行も牧畑において現存している。

引　用　文　献

1，浦郷町史（昭和26年）
2，今崎半太郎翁小伝（昭和25年）
3，隠岐島総合開発計画書（昭和28年）
4，島の農業形態（錦織英夫）（昭和28年）
5，昭和25年国勢調査結果報告書（島根県）
6，1950年世界農業センサス調査結果（島根県統計月報）
7，その他各種統計調査資料類